

一八八四年十月五日(日)

ドックネンシヨル
南神寺で——バブラーム、校長、ニーラカンタ、マノモハンをはじめとする
信者たちと共に

ハズラー氏——神への無欲な愛

タクール、聖ラーマクリシュナは、ドックネンシヨル南神寺の自室で昼食後、信者たちに囲まれて坐っておられる。床の上には、校長、ハズラー、年長のカーリー、バブラーム、ラームラル、ムクジェー兄弟、ハリたちが——或る者は坐り、或る者は立っている。ケーシャブ氏のご母堂ぼどう様の招待をうけて、前日、タクールはカルトラのナビン・セン邸を訪問され、数多くのキールタンを楽しまれた。

聖ラーマクリシュナ「(ハズラーに向かって)——きのう昨日わたしは、ケーシャブ・センの家(ナビン・セン邸)で、たいへんごちそうになったよ——とても献身的にもてなしてくれた」

〔ハズラー氏と第一原理の智識——ハズラーと批判辯〕

ハズラー氏は、もう長い間タクルの許もとで暮らしている。「自分は智者だ」といって、いささか

自惚うぬぼれている。人々の前で、タクルの批判さえ少しはする程だ。そのくせ、ベランダで自分の座布ざふに坐つて、えらく熱心に数珠をくりながら称名もするのである。チャイタニヤ様デシヤのことを、ハレ（最近）の「アヴァターラ」などと言つて軽く見ている。そして、こういうことを言うのだ——「神は純粹な信仰だけをお授けになるといふのは、それはちと違う。あの御方は、富と力においても欠けるところがないのだから、富や権力もちゃんと授けて下さる筈なのだ。神をつかんだなら、八大神通力のようなくもつく筈だ」

彼は家を建てたときの借金があつて——約千タカ位であるらしいが、そのことで常日頭悩んでいる。年長のカーリーは会社勤めをしている。給料は少ない。家には妻と子供たちがいる。大覚者バツワ様の熱心な信者だ。時々会社を休んでまでも、タクルのところによつてくるのである。

年長のカーリー（ハズラーに）「あなたはまるで試金石（批判の標準）になつたように——『この人は良質の金だ、あの人は質の悪い金だ』とばかり、人の批判ばかりしていますが、何でそんなことをするんですか？」

ハズラー「そういうことは皆、あの方（タクル）にだけ申し上げているのです」

聖ラーマクリシュナ「そりゃ、その通りだ」

ハズラーは第一原理クワットヴァ・ジュニヤムの智識ジュニヤムについて説明しはじめた。

ハズラー「第一原理クワットヴァ・ジュニヤムの智識とは何か——それはつまり、二十四の宇宙原理の存在、これを知ることです」

一人の信者「二十四の宇宙原理というのは何々ですか？」

ハズラー「五元素、六情、五つの知覚器官、それから五つの行動器官などですよ」(訳註、六情——色欲、怒り、貪欲、高慢、嫉妬、愛着。六人の仲間、六つの敵とも言う)

校長「(タクトールに向かつて)——はっはっはっは、この方は、六情を二十四の宇宙原理のなかに入れていきますね！」

聖ラーマクリシユナ「アハハハハハ。ハズラーに聞いてごらんよ、第一原理の智識カトトツァ・ジュニャーナというのは、どういうものか——。(訳註——ハズラーは何を言っているんだろうね？という意味) 第一原理の智識とは、アトマ・ジュニャーナは、クマ真我の智識シという意味なんだよ！ タットとは至上我を意味し、トヴァンとは個我ジトヴァンのこと。個我ジトヴァン(シ霊)と至上我は一つのものだと知ったとき、第一原理の智識を獲たというのさ」

ハズラーは間もなく部屋から出てベランダに行つて坐りこんだ。

聖ラーマクリシユナ「(校長たちに向かつて)——あれはただ議論するだけだ。そのときはよくわかるんだが——しばらくすると又、御破算もんどおりになる。

わたしはね、大きな魚がかかると釣り糸をゆるめてやる。そうしなけりや、糸が切れてせっかくの魚が水に戻ってしまうからね。それに、釣り糸を握っている人が水の中に落っこちてしまうからね。だからわたしは、あまりきつく言わないのさ」

〔ハズラーと解脱、六通力——無条件の信仰〕

「(校長に) ハズラーは、『バラモンに生まれなければ解脱できない』と言うんだよ。わたしは、『とんでもない！ 誰でも信仰を持っていれば解脱できるんだ。シャヴァリーは狐師の娘だし、ルヒダスは食事のとき鐘を鳴らす、そういう仕事(シュードラの仕事)をしていたんだよ。でも解脱しただろう。この人たちは信仰によって解脱したんだよ！』と言ってきかせたのに、ハズラーめ、まだ『でも！』と言うんだ。

ドルヴァがすぐれていたことは認めるんだが、ブラフラーダのことはドルヴァほど評価しない。ノト(ラトウ)が、『ドルヴァは子供の時分から神を慕っていました』と言うと、黙ってしまった。

わたしはね、『欲のない信仰、無条件の信仰——これ以上のもは何もない』といつも言っている。ハズラーはこれに反対するんだよ。

何かものをねだりそうな連中が来ると、金持ちはうんざりして——腹立たしそうに、『奴が来たよ！』と言う。そして部屋に入ってくると、一種独特の口調で、『まあ、お坐んなさい！』と言うが、いかにも不機嫌な顔付きだ。何か欲しがるような人を自分の馬車には乗せないよ。

するとハズラーは、『神はそういう金持ち連中とは根本的に違うでしょう。あの御方は無限の富と力を持っているのですからね。人にくれたって、ちっとも困りませんよ』と言う。

それから又、ハズラーはこんなことも言うんだよ——『空から雨が降れば、ガンジス河やほかの大きな河も大きな湖や池も水であふれます。同時に、その辺のちっほけな貯水池や水たまりまで水がいっぱいになります。あの御方のお恵みは、信仰や智慧を下さるだけでなく、富だつて下さるのです』と。

だがこれは、ちょっと汚れた信仰だよ。純粹な信仰には、おかげを欲しがる気持ちはないんだ。お前はここに来て何ももらおうと思っただろう。ただ、わたしに会って、わたしの話を聞くのが好きだから来るんだね。わたしもお前らのことをいつも気にかけているし——どうしているかしら、どうして来ないんだらう——いつもそう思っているよ。

何も求めない、ただ好きで愛している——これを無条件の信仰と言うのさ。純粹な信仰と言うのさ。プラフラータはそういう信仰を持っていた。領地もいらぬ、権力や富もいらぬ、ただ、神だけを求めていた」

校長「ハズラーさんはペラペラしゃべるばかりです。もう少し黙っているようにならないと進歩しませんね」

〔ハズラーの高慢と人物批判〕

聖ラーマクリシュナ「時々わたしのところにやってきて、まるで人が変わったように温和おとなになるのだがね！　すぐ又、疫病神みたいに理屈を並べたてる。我執高慢をなくすのは大へんな努力のいることだ。アスワッタの木を切っても、次の日、すぐ新芽がでる。根が残っているうちはだめさ。

わたしはハズラーに、『人の批判をするな！』と言うんだよ。

ナーラーヤナ自身があらゆる姿になつていなさるんだからね。それがわかつたら、悪い人に対してさえ拝む気持ちになれるものだ。

クマリリンブンシヤ
処女礼拝を見てみる。大小便はする、ハナも垂らせばタンも吐く、という当たり前前の小娘を、どう
いうわけで礼拝すると思う？ 宇宙の大実母バガヴァテイーの一つの相すがただからという理由で拜むのさ。

信仰者のなかに、あの御方は特別なかたちで宿すまつていなさる。信者は神さまの居間なんだよ。

ひょうたんが大きいければいいタンプーラ(弦楽器)ができる——いい音が出るよ。

ハツハツハツハツ……。なあ、ラームラル、ハズラーはそのことを何て言ったつけ——『アンティ
ス、バヒス、ヤデー、ハリス』だったかい？ それじゃ、『マトラム、バタラム、カトラム』つまり、
大実母は飯マを食マうマと言マつてマるマようマなマもマんマじマゃマないマか』(一同笑う)（訳註——サンスクリットの文法では、
ムムの語で終ムることが多いので、普通の言葉をサンスクリット風にしゃべって、ハズラーの知ムったかムぶりを皮肉ムつて
いる）

ラームラル「ははははは、『アンタルバヒリヤデー、ハリス、タバシヤ、タター、キム（神が内に
も外にも見えるなら、苦行をして何になる）』ですよ」

聖ラーマクリシュナ(校長に)「これをお前、よく暗記しておくように——。そして時々、わたしに言っ
て聞かせておくれ！」

タクルの部屋に備えつけてあったお盆が見えなくなっていた。ラームラルと女中のプリンデがそ
のお盆のことを話している。——「あのお盆、あなた様、御存知ありませんか？」

聖ラーマクリシュナ「最近、ちつとも見ないよ！ 前には確かにあったが——。わたしも見たけ
ど——」

タクル、聖ラーマクリシユナ、二人のサードウと語る——タクルの大覚バラマハンサの状態

今日、五聖樹パンチャパテイの杜に二人のサードウが来ていた。彼等はギーター、ヴェーダーンタのような聖典を研究している。昼食の後、タクルのところに来てお会いした。タクルは小寝台の上に坐つていらつしやる。サードウたちはあいさつをしてから床の敷物の上に坐つた。校長たちもそこに坐つてゐる。タクルはヒンディー語で彼等と話しておられる。

聖ラーマクリシユナ「あなた方、食事はすみましたか？」

サードウ達「ジー、すみました」(訳註、ジー——聖者など尊敬する人物につける尊称)

聖ラーマクリシユナ「何を食へなすつた？」

サードウ達「豆とロテイです。あなたもいかがですか？」(訳註、ロテイ——小麦粉をこねて伸ばして焼いたものでチャパテイと同等のもの。ちなみに、ルチは油で揚げてゐる分、贅沢品である)

「サードウと無私の仕事——神への信愛バクティ——ヴェーダーンタ——我ジはソレハムなり」と家住者」

聖ラーマクリシユナ「いや、わたしは炊いたお米を二度ほど食べます。ところで、ジー、あなた方は称名や瞑想をなさるだろうか、それは果報を求めずにおやりなさるのでしょうね？ 違いますか？」

サードウ「はい、上人マハーラーシさま」

聖ラーマクリシュナ「それは結構なことです。果実は神に捧げることです。違いますか？ ギーターにそう書いてありますよ」

サードゥ「（もう一人のサードゥに向かつて）——サンスクリットでギーターの一部を——

ヤト カロシ ヤド アシユナーシ ヤツジュホーシ ダダーシ ヤト

ヤト タバツシヤシ カウンテーヤ タツト クルツシユヴァ マドアルバナム

「お前が行う一切の行為を お前が食べる一切の食物を

お前が捧げる一切の犠牲を お前が与える一切の施しを

お前の行ずる一切の苦行を おお、クンティ妃の息子（アルジュナ）よ

あらゆるものを このわたし（神）に捧げよ」（——ギーター9・27——）

聖ラーマクリシュナ「あの御方に一つの徳を捧げると、千の徳が得られる。だから、仕事をし終えてから水を一すくい供えるのは、クリシュナに果実（報）を捧げるという意味なんだよ。

ユディステイラが自分の罪を全部、クリシュナに背負（しよ）ってもらおうとしたとき、ある人（ピーマ）が注意してこう言った——『そんなことなざるな。クリシュナに供えたものは千倍になって返ってきますぞ！』と。だから、ジー、無私であるべきです。いろんな欲望を捨てるべきです。違いますか？」

サードゥ「ジー、その通りです」

聖ラーマクリシュナ「でも、わたしには信仰という欲がある。ただ、これは悪くないどころか、あつた方がいいのです。甘い菓子は害になる——酸になるからね。だが、氷砂糖は体のためになる。そうでしょう?」

サードウ「ジー、^{マハーラジ}上人、その通りです」

聖ラーマクリシュナ「ときに、ジー、ヴェーダーンタをどう思いますか?」

サードウ「ヴェーダーンタは六派哲学の全部をふくんでおります」

聖ラーマクリシュナ「しかし、ヴェーダーンタの核心はこうでしょう——ブラフマンのみ真実在、世界は虚仮。私というものは別に存在しない。私はそのブラフマン以外の何ものでもない。そうでしょう?」

サードウ「ジー、その通りです」

聖ラーマクリシュナ「しかしね、世間に住んでいる一般の人たちや、肉体意識のある人たち(自分が体であるという意識がまだ残っている人たちが、[〃]我はソレなり(ソーハム)[〃]などと思うのはよくないことですよ。世間並みの生活をしている人にとっては、ヨーガヴァシシュタやヴェーダーンタはよくないね。大それたことになる。一般の人は、主人に対する召使いの気持ちをもつておくべきです。[〃]神さま、あなたのご主人。主よ、私はあなたの召使いです[〃]というふうに——。

^{からだ}肉体が自分だと思っている人たちが、[〃]我はソレなり[〃]という気持ちを持つのはよくないことです」

(訳註、ヨーガヴァシシュタ——聖^リ仙^リヴァシシュタによって説かれたヨーガの教え)

皆、沈黙している。タクールはひとりでかすかに笑っていらつしやる。至高アイトマラーマの喜び(真我)を楽しまれている様子だ！

サードウの一人が、相手に向かってヒソヒソと何かささやいている——「それ、よく見なさい！ これこそ、大覚者パラアセンサの風態よつというものだよ」

聖ラーマクリシュナ(校長に)——笑いたくなくなったよ」

タクールは、まるで子供のように無邪気に、ひとりでニコニコしていらつしやる。

タクール、聖ラーマクリシュナとシ女シ——出家のきびしい戒律

〔むかし以前の話——義父の家を訪ねたいと思つたこと——ウロのヴァマンダースとの出会い〕

こうして、サードウたちはタクールに会見した後、帰つていった。

タクールとバブラーム、校長、ムクジュエー家のハリ等、信者たちは部屋のかなやベランダを行つたり来たりしている。

聖ラーマクリシュナ(校長に)ナビン・センの家にお前、行つたかい？」

校長「はい、行つておりました。階下したの部屋で歌を聴いておりました」

聖ラーマクリシュナ「そりゃよかつた。お前の妻も来ていたね。ケーシャブ・センとはいとこ同志だそうだね？」

校長「遠縁でございます」(訳註——ケーシャブはマヘンドラ・グプタの妻の従兄弟いとこ——妻の父親の弟の息子)

ナビン・セン氏はここによく来る信者の一人にとつて義父しやうふすじにあたる。

モニとぶらぶら歩きながら、タクルルはごく個人的な話をなされた。

聖ラーマクリシュナ「人はよく義父しやうふの家に行くものだよ。わたしもね、結婚して義父しやうふの家遊びに行つて、楽しく暮らしたいと思つていたものさ！　ところが、こんな風になつてしまつた！」(訳註、こんな風——信者に囲まれた生活)

モニ「はあ。子供が父親の手をつかんでいる場合は転ぶこともある。だが、父親が子供の手をつかんでいてくれたら、決して転ばない」と、あなた様はおっしゃいました。あなた様は、まさにその通りの境遇でいらつしやいます。宇宙の大実母が、あなた様をしつかりつかんでおられますから——」
 聖ラーマクリシュナ「ウロのヴァマンダースとヴィシュヴァスの家で会つたがね。わたしは、『わたしはあなたに会いに来たんだよ』と言つた。帰りしなに、彼がこんなことを言うのが聞こえたよ——『パパ、虎が人間をつかまえるように、大女神がこの方をつかまえてしまいなすつた！』まだ若い時分だつたが——体も丈夫でね、いつも神への想いに没入していたつけ！

わたしは女がとても恐ろしい。女を見ると、牝虎めいこが自分を食べに来るような感じがするんだよ！
 それに、女の体や手足や、毛穴までが、バカに巨大おほおほ大きく見えるんだ！　怪物ばけものみたいに見える。

以前まえは、もつともつと恐ろしかったよ！　女は誰でも近くに寄せつけなかつた。それでも今は、一生懸命に自分の心に言い聞かせて、あれは、ひとりひとりが歓喜アイナンダの大実母マートリの現れなのだと見ている。

大実母マートリの一部だ。だがね、男にとつては、サードゥにとつては、信仰者にとつては——捨てるべき

ものだ。

どんなに信仰深い人でも、わたしは女の人を長いこと傍に坐らせておかない。少し経つと、『お寺に行つて神さまを拜んで来なさい』と言つてすすめる。それでも立たない場合は、タバコをすうからとか言つて、自分が部屋から出ていく。

よく見ると、女の人に全然関心がない男たちがいるよ。ニランジャンは、『私は全く女性に興味がありません』と言つている」

〔ハリバープ、ニランジャン、ビハール人のパンデ、ジャイナラヤン〕

「ハリ(ウベン・タッタの兄弟)に聞いてみたら、彼も、『いえ、私は女性に関心がありません』と言つたよ。

至^{かみ}聖に捧げなければならぬ心のうち、四分の三は女に持つて行かれる。子供でもできたら、心のすべては妻子のために費^{つか}われてしまう。そうなつたら、至^{かみ}聖にどれだけのものを捧げられるというんだね？

人によつては、妻子を養うために精根尽き果たしてしまう。ビハール人のパンデは門番で、大それた年寄りだが、彼には十四才の妻がいる！ 十四才で年寄りといつしよに住まなけりやならないんだ！ 木の葉で葺いた小屋だ。木の葉をそつとめくつては人が内部^{なか}をのぞく。それが嫌で女は出て行つてしまった。

またある人の女房は——その人は女房をどこに置いたらいいかわからない。家族にもめごとがあつ

てね、たいへんな悩みようだ。——こんなくだらん話はもう止めよう。

それに、女の人といっしょに住んでいると、必ずといっていいほど尻に敷かれてしまう。世間の人
は、女たちが立てといえど立つ、坐れといわれれば坐る。一人残らず、自分の女房をほめそやす。

わたしはある場所に行きたいと思った。ルームラルの叔母(つまりタクルの妻、サーラダー・デーヴィー)に相談したら、行くなど言ったのでとうとう行かれなかった。しばらくしてから思ったよ——ウー
ン、わたしは、家庭を持っていない、女と金を捨てた人間だ。それでさえこのザマだ！世間の男
どもはまあ、女房にどんなふうに乗られているか、想像がつくというものさ！

モニ「女と金の真つ只中に暮らしていますと、どうしても少しづつ汚れてまいります。いつか、お
話になりましたね、ジャイナランは大学で大そう古いこんでいたけれど、あなた様が行かれたと
き、枕と毛布を日に当てて干しておられたそうで——」

聖ラーマクリシュナ「学者といつても、あの人には驕り高ぶりはちつともなかった。それに、自分
でさきに言っていた通り、生涯の終わりのころはカーシーに住みついて、聖典に書いてあることをちゃ
んと守って暮らしていたよ。息子たちを見たが、ブーツを履いて英語を習っていた」

〔タクルの愛の狂気、その他のいろいろな境地〕

タクルは、モニに問題を提起する形で、ご自分の境涯を彼に理解させようとしておられる。

聖ラーマクリシュナ「以前はひどく気狂いじみていたが、なぜ今は、あれ程ではなくなったのだから

うね？ でも時々、前のようになるが——」

モニ「あなた様は、ずっと同じ境地でおられるわけではございません。ご自分でもおっしゃるようには、時には子供のようになつたり、時には気がおかしいように見えたり、時には木や石のようになられたり、時には食屍鬼シビヤナのようになられたり、時々、ご気分がお変りになるのです。それに時々は、ごく当たり前の気楽なご様子にもおなりですし——」

聖ラーマクリシュナ「ああ、子供みたいなものだよ。それに、少年や青年の仲間入りをしたような、そういう気分にもなるしね。智識を与えるときは青年の気持ちだ。

それから、少年のようにもなる。十二、三才の少年のように、ふざけちらしたくなることもあるよ。だから、若い連中をからかったりするんだ」

〔ナランの長所——女と金を捨てることこそ出家のきびしい修行〕

「そうだ、ナランのことをどう思う？」

モニ「はあ、実にいい素質を持っていますね」

聖ラーマクリシュナ「あのヒヨウタンの皮は上等だ。タンプーラ（弦楽器）にしたらいい音が出るよ。

彼はわたしに、『あなた様はすべてです（つまり、神の化身だということ）』と言う。それぞれが自分でつかんだだけのことを話す。わたしのことを、見た通りのただの信心深いサードゥ（苦行）にすぎない、という人もあるしね。

(ナランは)してはいけないと教えてやったことを、実によく身につけるんだよ。いつか、ついうっかりして、カーテンを開ける」と言いつけたら、彼は開けなかった。

と言うのはね、わたしは彼に、こういうことを禁じていたのさ——(訳注)結び目をつくること、ものを縫うこと、カーテンを開けること、戸や箱などに鍵をかけること。だから、それを確実に身につけたんだね。俗から脱け出ようとする人は、こういう修行をしなければならぬ。出家としての修行なんだよ。修行の途中では、女は燃えさかる山火事か、黒コブラのようなものだ！ 完成して至聖かみを見た後は、大実母ママの楽しい現れだ！ それぞれが宇宙の母の相すがたの一つとして眺められる」

数日前、タクールはナランに対して、女に関するさまざまの注意事項をお与えになった——「女の人の体のそばの空気にさえ触れないようにしろ。厚い布を体に羽織って、女たちの空気が体にあたらぬようにしろ。母親以外の女から八ハト(4メートル)、少なくとも一、二ハト(1メートルくらい)はいつも離れていろ」などなど。

聖ラーマクリシュナ「それからね、母親がナランにこう言ったそうだ——『あの方にお会いすると、私でさえ魅ひきつけられてしまうのだから、まして、お前のような年端としはもいかぬ子供はねえ！』

素直でないと神に触れることはできない。ニランジャンはほんとに素直だ！」

モニ「まったく、おっしゃる通りでございます」

〔ニランジャンとナレンドラは素直〕

聖ラーマクリシュナ「いつか、カルカッタに行くとき、馬車のなかで気付かなかったかい？ あれ（ニランジャン）はいつだつて同じ態度だ——素直で、明けつひろげで。人というものはたいいてい、自分の家の中と外では態度が違うものだけれどね！ ナレンドラは今（父の死後）、世間を相手の悩みごとと振り回されていて、ほんのすこし計算高くなっているが——。どの青年も彼等のようになれると思ukai?」

〔聖ラーマクリシュナ、ナビン・ニヨーギの家でニーラカント劇を見物〕

「今日、ニーラカントの芝居を見物してきたよ——南神村のナビン・ニヨーギの家でね。あそこの子供たちはとても性が悪い。この人の悪口を言ったり、あの人の悪口を言ったりばかりしてさ！ ああいう場所では、霊的な感情が抑えられてしまう。

いつかの芝居のとき、医者ドクタイのマドゥが涙を流して見物していたから、わたしは医者ドクタイの方ばかり見つ

（訳註1）

- ・ 結び目をつくる——インドでは、一枚の布にお金を入れて包んで結んで持ち歩いたので、お金を持ち歩くことを意味する。
- ・ ものを縫う——まだまだ使っていこうという執着を持つこと。
- ・ カーテンを開ける——自分の修行を人に見せること。また、世間に対して関心があること。
- ・ 戸や箱などに鍵をかけること——自分の物、自分の場所などをつくること。

「めていたつけ。ほかの人の方は目を向けることもできなかったよ」

聖ラーマクリシュナ、ケーシャブとブラフマ協会——大調和の教え

The Universal Catholic Church of Sree Ramakrishna (聖ラーマクリシュナの普遍的で包容力のある教え)

聖ラーマクリシュナ「(モニに向かつて)ところで、人がこんなに惹きつけられて此処にやってくるのは、どういいうわけだろうね？」

モニ「わたしはヴラジャのリーラーを思い出します。クリシュナが牧童や仔牛に姿をお変えになったので、牧童たちには乳^ゴしほり娘^ビたちが、また仔牛のところには牝牛どもが、いや応なく惹きつけられて集まってきました」

聖ラーマクリシュナ「それが神様の引力なんだよ。わかるかい？ 大実母^マがこんなふう^マに魔法の仕掛けをして下さるから、惹きつけられるのさ。

それはそうだが、ケーシャブのところ^マに集まったほどは此処には人が来ないね。それに、ケーシャブはあれほど多くの人々から尊敬されて——イギリスにまで知れていて、(ヴィクトリア)女王^{クイーン}がケーシャブと話をした！ ギーター^(訳註)にも書いてあるが——大勢の人に尊敬される人^マのところには神の力が現れている^マ。此処はそれほどじゃないね？」

モニ「ケーシャブ・センのところには、俗人が集まったのでございますよ」

聖ラーマクリシュナ「ウン、その通りだ。この世のことにしか関心のない連中だ」

モニ「ケーシャブ・センがして行ったことは、この先、長くつづくでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「どうして？ あの会専用の聖典サンクリまで作ってるそうじゃないか。どれだけの規則が載ってることか——」

モニ「神の化身アヴァターが自らの使命を果たされる場合とは、全くちがうと思います。たとえばチャイタニヤデーヴァ様のなさったことのような——」

聖ラーマクリシュナ「はい、はい、その通りだよ」

モニ「あなた様もおっしゃいましたね——『チャイタニヤデーヴァ様は、自分が種を蒔いたものは、いつかやがて成長して役に立つだろう、と言いなすった』と。家の棚のような場所においてあつた種子は、人が去つてその家が落ち崩れてから芽を出して大木になりましょう」

聖ラーマクリシュナ「シヴァナートたちのつくつた会にも、大勢の人が行くらしいね」

モニ「そうです。さつき言ったような連中が行くのです」

聖ラーマクリシュナ「アツハツハハハ。そう、そう、俗人が行くのさね。神を心から慕う人——女と金から何とかして離れようと努力している人——こういう人たちがあまり行かないのは確かだよ」
モニ「此処から一つの川が流れ出したら、立派なものになりましょう。その流れの力で、すべての

（訳註2）栄光に輝くもの まうれ 壮麗なものの 偉大なもの 善美なものはすべて

わたしの光輝より発した閃光きんこうの 一つにすぎないということを知れ —— ギーター 10・41 ——

ものが流れ去るでしょう。此処からできるものはもう決して、退屈で独善的な偏見をもったものにはならないでしょう」

〔聖ラーマクリシユナとヒンドゥー教、イスラム教、キリスト教、ヴィシユヌ派とブラフマ協会員〕
 聖ラーマクリシユナ「ハッハッハッ。わたしは、それぞれの人の考えや気持ちを大切にしてやるんだよ。ヴィシユヌ派の人にはヴィシユヌ派の理想を大事に持っていると言うし、シヤクテイ派信者にはシヤクテイ派の教義おしえを守れと言う。だが、もひとつ、こう言つてきかせる——『自分の道だけが正しくて、他の道はみな間違いだ』とは決して言つたり思つたりするな』と。ヒンドゥー教、イスラム教、キリスト教——いろんな道を通つて同じ場所に行こうとしているんだからね。自分に適したそれぞれの理想を大事にしながら誠心誠意あの御方に呼びかけていけば、きつと至聖かみをつかむことができるんだよ！

ヴィジヤイの義母しやうとめがこう言つた——「あんた、バララームたちに言つてくれませんか。形のある神を拜む必要はない。無形の神、サッチダーナンダに祈りさえすれば十分だ』と。

わたしは答えたよ——『そんなこと、どうしてこのわたしが言わなけりゃならんのだ。たとえ言つたとしても、彼等がどうして聞かなけりゃならんのだい？』

母親は魚を料理するとき、ある子供にはピラフをつくつてやるが、腹をこわしている子には魚のスープをこしらえてやる。その子の好みや体調で、いろいろな形にして与えなくてはならない」

「モニ」はあ、おっしゃる通りでございます。その国と、時代と、個性のちがひによって、それぞれ別の道があるのです。ですから、どの道を通ってもかまわない。ただ、心を清くして、心の底から熱心に求めさえすれば、神にふれることができるのです。あなた様がおっしゃったことですが——」

〔ムクジエー一族のハリ——聖ラーマクリシュナと寄付、瞑想〕

部屋のなかのいつもの場所にタクールは坐っておられる。床にはムクジエー一族のハリや校長たちが坐っている。一人の見知らぬ人がタクールにあいさつをして坐った。タクールは後で、この人のことをこう言われた——「あの人の目の特徴はよくないね。猫の目のように黄色だ」

ハリはタクールに、煙草の用意をして差し上げた。

タクールは水ギセルを手にとつてから、ハリに向かつて、「どれ、お前のを見てみよう。掌てのひらを見せごらん。——この筋はいい特徴だ。

手の力を抜いてごらん。——（ご自分の手の上にハリの手をのせて、目方を測るようにして）まだ子供のよくな気持ちが残っているね。まだ悪いことをしていない。（信者たちの方を向いて）わたしはね、手を見るとその人が嘘つきか正直かわかるんだよ。（ハリに）どうだい、義父しやふさんの家に行つて、嫁さんと話をして——。なんなら、少し楽しんで来ては——。

（校長に向かつて）——「どうだろうねえ？」（校長たち笑う）

校長「そうです。新しい壺が悪くなれば、もうミルクを入れておけませんから——」

聖ラーマクリシユナ「アツハツハツハツハ、まだ悪くなつていないことが、どうしてわかつたんだい？」

ムクジエーは二人兄弟で——マヘンドラとプリヤナートである。彼等^よは他所^よに勤めてはいない。自分たちの製粉工場を持っているのだ。プリヤナートの方は、以前、技術者としての仕事をしていた。タクールはハリに、このムクジエー兄弟のことをお話しになる。

聖ラーマクリシユナ「(ハリに) 兄さんの方はいい人だね？ 違^{ちが}うかい？ とても正直だ」
ハリ「はい、おっしゃる通りです」

聖ラーマクリシユナ「(信者たちの方を向いて) 弟の方は、だいぶケチだそうだね？ ここへ来るようになってから、ずいぶんよくなつたらしいが——。わたしにこう言つたよ——『私は今まで、何も知りませんでした』と。(ハリに) あの兄弟は、何か寄付か施しのようなことをするかい？」

ハリ「あんまりしないようですが——。あの人たちの一番上の兄はもう亡くなりましたが——とても立派な人でした。寄付や施しも沢山しましたし、瞑想もしておりました」

〔タクール、聖ラーマクリシユナと肉体の特徴——マヘーシユ・ニヤーヤ・ラタン^の生徒〕

聖ラーマクリシユナ「(校長たちに) 体の特徴を見ると、いろんなことがわかる。靈的に進歩するかどうかということも——。悪^{あく}だくみを持っていると、手が重たくなる。

鼻がぺちやつとしているのはよくないよ。シャンブーは鼻がぺちやつとしているが、いろんなこと

を知っているくせに心が素直じゃない！（訳註——鼻の高いインド人の中で、鼻がべちゃつとしてるのは良くないとしている。生来鼻の低いアジア人には関係ない）

鳩胸はとむちもよくない。骨が特別固くて太かったり、肘ひじの関節がぎこちないのも（肩から肘ひじまでに比べ、肘ひじから手までの長さが短かったり、太さが細くなっていたりすること）いけない。それから、猫の目みたいに金茶色の目——。

厚い唇——ドム（焼き場の仕事や使所掃除をする不可触民アシラナナブルのような——品性が賤いやしい。ヴィシユヌ殿で何か月か司祭をしていたバラモンがいてね！ その人の触ったものは食べられなかった。——あるとき突然、わたしは叫んでしまった——あれはドムだ！ そのあとのこと、ある日、その人が言ったよ——『ええ、自分たちの住居はドムの町内にあるのです。私はドムが生活の足しでやっている籠かご編あみを知っています』と。

それから、もっと悪い特徴は、めっかち（片目）とやぶにらみ（斜視）——。やぶにらみよりはめっかちの方がまだましだ。やぶにらみは絶対よくない。邪悪でウソつきだ。

マヘーシユ（マヘーシユニヤ・ヤ・ラタン）の生徒が一人、ここに来た。彼は、『私は無神論者です』と言った。フリダイに向かつて、『私は無神論、君は有神論の側から議論しよう』と言った。よくよく見ると、猫のような目だったよ！

歩き方を見ても、いい人か悪い人かわかるものだ。イスラム教徒がやってるような割礼をしてるのは、ことさら悪い（校長たち笑う）。

(校長に微笑みながら) お前、悪い特徴しるしがあるかどうか見てみる! (皆笑う)

タクールは部屋からベランダの方にぶらぶら歩いていらっしやる。校長とバブラームが従ついて行く。聖ラーマクリシユナ(ハズラー)にある人が来た。見ると猫のような目だった。その人はわたしに、

『あなた様は占星術をご存知ですか? 私はある困難に直面しているのです』と言った。わたしは答えたよ——『いや、知らないね。パラナゴルへ行きなさい。あそこには占星学者がいるから——』

バブラームと校長がニーラカンタの劇の話をはじめた。バブラームはナビン・センの家から昨夜、南神村ドフキネーシヨルにかえってきてここに泊まったのである。朝、タクールといっしょに、南神村ドフキネーシヨルのナビン・ニヨギの家でニーラカンタ劇を見物したのだ。

〔聖ラーマクリシユナ、モニと秘密の神想い——神の思召し——ナランへの思いやり〕

聖ラーマクリシユナ「(校長とバブラームに) お前たち、何の話をしているんだい?」

校長とバブラーム「はあ、ニーラカンタの芝居の話をしているのです。それから、あの歌の話も——シヤーマの御足みあしにあこがれて、河の渡し場にわれは住み」

タクールはベランダをそぞろ歩いておられたが、突然、モニを脇に連れて行ってこう言われる——「神への想いは、人に知られなければ知られないほどいいんだよ」急にこうおっしゃるとすぐ、タクールはあちらの方に立ち去られた。

タクールはハズラーと話をなさっている。

ハズラー「ニーラカントが、あなたを訪ねて来たいと言っておりましたよ。呼びにやった方がよくありませんか？」

聖ラーマクリシュナ「いや、あの人は一晩中起きていたんだから——。神さまの思召しで、向こうからひとりりで来るなら別だがね」

タクールはジャウタラの方へ行かれた。バブラームと校長も従って行く。タクールはバブラームに向かつて、ナランの家をたずねて彼に会うようにおっしゃった。ナランをナーラーヤナの現身と見ておられるのである。だから、彼に会いたくてたまらないお気持ちなのだ。バブラームにおっしゃる——「お前、英語の本を一冊持つて行った方がいいかもしれないよ」（訳註——家のものに、タクールの話をする為じゃなく、勉強のためにやって来たと思わせた方がいいと思っただけで言っただけのタクールの気遣い）

ドツキネーショル

南神村——ニーラカントおよび信者たちと共にキールタンを楽しむ

タクール、聖ラーマクリシュナは、自室のいつもの場所に坐っておられる。時間は午後三時ころ。ニーラカントが、五、六人の仲間を連れて、タクールの部屋に到着した。タクールは彼等を迎えるかのようになり、前に歩き進まれた。ニーラカントは部屋の東側の戸から入ってきて、床にひれ伏してタクールを拝した。

タクールは三昧に入られた！ タクールの西側にはバブラーム、正面には校長、突然のタクールの変容にびっくり仰天したニーラカントと役者たち——。寝台の北側では、寺の職員ディーナナートが

見ていた。みるみるうちに、部屋は神殿の人たちでいっぱいになった。やがて、タクトールは少し平常の状態に戻られて、床のマットの上にお坐りになった。正面にはニーラカント、周囲には数多くの信者たち——。

聖ラーマクリシュナ「(まだ法悦に酔ったままで)——わたしは元気だよ」

ニーラカント「(合掌して) 私をも元気にして下さいませ」

聖ラーマクリシュナ「ハハハハハ、お前はもともと元気じゃないか。カッ^カにアッ^アをつけるとカーになるが、もひとつアッ^アをつけたらどうなる? カッ^カにもひとつアッ^アをつけたって、やっぱりカッ^カだよ」(一回笑う)(訳註——もう、十分神に帰依して立派な信者じゃないか、という暗示)

ニーラカント「そうおっしゃいますが、私は俗世間に巻き込まれて、アップアップしているのでございませう」

聖ラーマクリシュナ「お前が世間に置かれているのは、多くの人々のためだ。

八つのカセ——全部とるわけにはいかない。二つかそこらのカセを、あの御方は残しておきなさい——人々を導くためにね。お前はこの劇団をつくったが、お前の信仰を見ることで、どんなに大勢の人のためになっていることか——。それに、お前がこれを放り出してしまったら、ここにいるお人たち(役者たちのこと)はどこへ行きなすつたらいいのかね。(訳註、八つの枷^{カセ}——憎^{けはく}しみ、恥^{かたじけなく}ずかしいと思^カう気持ち、恐れ、階級^{カラス}の誇り、家柄の誇り、品の良^カさの誇り、悲^カしみを引きずること、他人のあら探し)

あの御方が、お前を通じて仕事をしてなさるのさ。仕事がすんだら、お前はもうそこへ戻らないだ

ろう。主婦は家事一切をすませて——皆に食事をさせて、女中や下男にまで食べさせて、それから水浴びに行く。そのときはもう、誰が大声をあげて叫んでも振り向きもしない」

ニーラカント「私に祝福を与えて下さいませ」

聖ラーマクリシュナ「クリシュナに別れたヤシヨーダーは気狂いのようになって、シュリー・ワティ聖女ラーダーのところに行きなすった。ラーダーはそのとき瞑想していなさった。ラーダーは憑かれたような様子でヤシヨーダーに言った——『私はあの大自然の根本、根元エネルギー（アディヤシャクテイ）だ！お前は、私に願いごとをするがよい！』ヤシヨーダーは申し上げた。『ほかに何をのぞ希みましよう！全身全霊であの御方を想い、あの御方に仕えることができよう——。この耳で、あの御方の名と讃歌が聞けますように——。この手で、あの御方とあの御方の信者に奉仕できますように——。この目で、あの御方の姿を、あの御方の信者を見ることができよう——』

お前がああ御方の名を口にするとき、目から涙があふれて来るね。そこまでいつているのに、今さら何を悩む？ ああ御方に対するお前の愛は、もう大きく育っているんだよ。

多々を知るのを名づけて無智という。一々を知るのを智と言う。つまり、一なる神こそ真実在で、あらゆるものに宿っていないさる、ということだ。ああ御方と語り合うこと、これを覚智ウジニニヤトという——ああ御方をつかんで、いろいろな気持ち、態度で愛するのを覚智ウジニニヤトという。

まだある。ああ御方は一、二を超えている。言葉と心を超えている。ラーラー（相對）からニティヤ（絕對）に、また、ニティヤからラーラーに往來する。——これを成熟した信仰という。

お前の、あの歌はとてもいいね——ッシャーマのみ足にあこがれて、河の渡し場にわれは住み〴〵と
いう、あれ。

それでいいんだよ——すべてはあの御方のお恵みに依る、ということが分かれね。

だが、そうは言っても、あの御方を呼ばなけりゃいけない。黙っていちゃいけない。弁護士だつて
裁判官にありとあらゆることをしゃべったあげく、最後に、『私として言うべきことは、すべて申し
述べましたので、あとは裁判官閣下のお心ひとつです』と言うだろう」

ちよつと間をおいて、タクールはニーラカントに又、こうおっしゃった。——「お前は朝方、あんなに
沢山歌つて、その後でまた此処に來たりして、御苦労なこつたね。でもここには、オナラリー(名
誉だけだよ)〔訳註、オナラリー=Honorary——タクールは覺えた英語を使つていらつしゃる)〕

ニーラカント「どういう意味でございますか?」

聖ラーマクリシユナ「アハハハハハ、わかっていますよ。あなた様がおおせになることは——」

ニーラカント「値ねのつけようもない程の宝玉をいただいて帰りたいのです!——」

聖ラーマクリシユナ「その、値のつけようもない貴い宝玉は、あなた様のところにございますよ。
カーにまたアをつけ足しても何になるかね? そうでなかつたら、お前の歌をわたしがこんなに氣
に入る筈がないだろう? ラームブラサードは出來ていたから、彼の歌は人の心を動かすんだよ。

普通の人間をマヌシヤ(男)という。靈に目覺めた人間はマヌホーシユだ。だからお前は、マヌホー
シユだよ。(訳註、マノー——心。ホーシユ——理解し得る、目覺めた、知識、などの意味)

お前が歌うと聞いたから、わたしははじめから行くつもりだった。おまけに、ニヨーギまで誘いに来たからね」

タクルルは小さい寝台の、いつもの場所に上がられてお坐りになった。ニーラカントに、「マーの名をたたえる歌をちよつと聞かせておくれ」とおっしゃった。

ニーラカントは、仲間といっしょに歌をうたった――

――シャーマのみ足にあこがれて

河の渡し場にわれは住み……

――マヒシャマルデイニー

マヒシャマルデイニー――ドウルガー女神の
別名。「マヒシャを殺す者」の意

この歌を聞きながら、タクルルは立ち上がって三昧サマデーにお入りになった！

ニーラカントは、歌のなかでこんな言葉を言った――「その頭髮からガンガーの流れるお方（シヴァ）の心には、ラージャラージェーシュワリー（至高の女神）が住み給う」

タクルルは愛に狂ったようになられて踊りはじめられた。ニーラカントと信者たちは、タクルルの周囲をまわりながら歌い、かつ踊る。

——シヴァ、シヴァ

ニーラカントがシヴァ神の歌をうたうと、この歌にもあわせてタクールは信者たちといっしょに踊られた。

歌は終わった。タクールはニーラカントにおっしゃる——「わたしは、あんたのあの歌が聞きたい——カルカッタで聞いた、あの歌を」

校長「聖ガウランガは美しくも新しき踊り手、溶けた黄金のように光りがやく——」

聖ラーマクリシュナ「それ、それ！」

ニーラカントはその歌をうたった。

聖ガウランガは美しくも新しき踊り手

溶けた黄金のように光りがやく

……

愛の流れに押し流されて——というくだりをくり返しながら、タクールはニーラカントや信者たちといっしょに、又、踊っておられる。その、言葉にも声にも表せない踊りを見た人々は、決して、生涯忘れることはないだろう。部屋は人で満ちあふれ、一人残らず狂気せんばかりだった！ この部屋

はシユリーヴァースの中庭（チャイタニヤが信者たちと踊り狂ったところ）のようになってしまった！

マノモハン氏が前三昧状態になった。彼の家から数人の婦人たちが来ていた。彼女たちは北のペランダから、このすばらしい踊りとキールタンを拝見している。この中でも一人の女性が、半三昧の状態になった。マノモハンはタクルの信者で、ラカールさんの親戚筋にあたる。

タクルは再び歌をおうたいになった――

ハリの名よんで涙を流す

あの二人の兄弟がきたよ！

キールタンを歌いながらタクルは、ニーラカントや信者たちと共に踊り、かつ、即興句をお入れになる――

ラーダーの愛に酔いしれた

あれ、あれ、二人の兄弟がきたよ！

声高のキールタンを聞いて、あちこちから人が集まってきた。南の、北の、また西のペランダにその人たちは立っている。舟でガンジス河を往来している人々も、この甘美なキールタンの声を聞いて

うっとりするのであった。

キールタンは終わった。タクールは宇宙の大実母にあいさつをなさつて、そして、こうおっしゃる——「バーガヴァタ、バクタ、バガヴァン（神の言葉と、神の信者と、神はひとつ）——智者の方々、ごきげんよう！ ヨーギーの方々、ごきげんよう！ 信者の方々、ごきげんよう！」

こんどタクールは、ニーラカントたちや信者たちと連れだつて、西の円ペランダに行つてお坐りになった。今日はコジャガルの満月の次の日。日が暮れて、あたり一面、月の光が降り注いでいる。タクールはニーラカントと楽しそうに話しておられる。

〔タクールは何者？ 私を探しても見当らない——部屋にチャンディーをもつてくる〕

ニーラカント「あなた様こそ、ガウランガの生まれ更りでいらつしやいます」

聖ラーマクリシュナ「とんでもない！ わたしや、みんなの召使いの、その又使い走りだ。

ガンジス河の波だよ。波のガンジス河じゃないだろ？」

ニーラカント「あなた様はそうおしゃいますが、私共は、あなた様をガウランガその人だと思つております！」

聖ラーマクリシュナ「少し恍惚となつて、静かな声で」バブ、わたしの私を探しても、どうしても見つからない。（訳註、バブ——ベンガルでごく親しい人に愛情を込めて、お前と呼びかけるときに用いる言葉）

ハヌマーンはこう言った——『おお、ラーマよ。時にはあなたが全体、私はその一部分だと感じま

す。また時には、あなたが主人、私は召使い。そして、私が第一原理の悟境にあるときは、あなたが私、私がある！」

ニーラカント「この上、何を申しましょう。何とぞ、私共にお恵みを賜わりますように」

聖ラーマクリシュナ「ハハハハハ、お前はこんなに大勢の人たちを渡しているのに——お前の歌を聴いて、どんなに多くの人たちが靈に目覚めることだろう」

ニーラカント「渡すなどとおっしゃいますが——。どうぞ祝福して下さいませ——私自身が溺れないように！」

聖ラーマクリシュナ「ハハハハハ、お前が溺れるとしたら、不死の甘露海だよ！」

タクルは、ニーラカントに会ったことをとても喜んでおられた。彼に向かってこうおっしゃるのだ——「お前が此処に来てくれるとはね！ たくさん修行を積んだ者でなけりや、お前さんには会えつこないのね！ まあ、わたしの歌を聞いておくれ——

ギリよ！ ガネーシヤは私の福の神——

ガネーシヤに祈れば 雪山の娘に会える

さあ、行き給え 山の主（シヴァ）

雪山の娘を連れてきておくれ

ビルヴァの花かげで 祈願を宣べると

ギリ——ギリ王^ニヒマラヤ王、ハイマヴァ
ティーの父

ハイマヴァティー——シヴァの後、パール
ヴァティーの別名

ガネーシヤの恵みで 色白の女が来る

チャンデイーがわが家においてなされば

どれほど多くの坊さま方や

モジャモジャ髪のヨーギーがやつてきて

堪能するほどお経がきける

大実母^マの別名・チャンデイーと、聖典『デー
ヴィー・マハートミヤ』の別名・チャンデイー
をかけている歌

チャンデイーが来るときには——そのときは、どんなに大勢のモジャ髪のヨーギーが集まってくる
ことか——」

タクールはお笑いになった。そして、校長やバブラムたちにこうおっしゃった——「わたしや、
おかしくてたまらないよ。こう思うとね——歌の名人の役者さんたちに、わたしの歌をきかせている。
と思うとね、ハッハッハッハ」

ニールカンタ「私共が歌をうたって歩いているごほうびを、今日始めて頂戴いたしました」
聖ラーマクリシュナ「ハハハハハ、商人が何か一つ売ると、客にちよつとしたオマケをやる——お
前たちはナビンの家で歌ったのに、オマケは此^{こゝ}処でくれたね」（一同笑う）